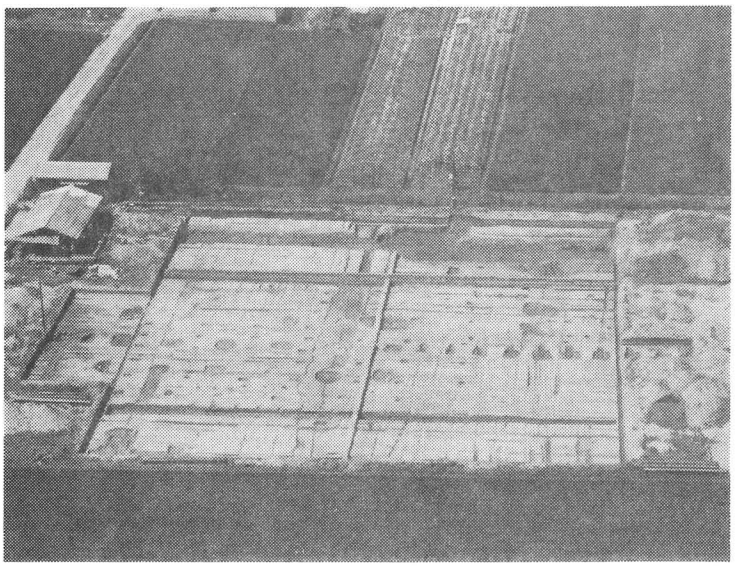
藤原宮第18次の調査

（昭和50年6月～昭和51年1月）

この調査は，大極殿土壇の北方380mに位置する藤原宮北面中門推定地を中心として，その周辺部を含む約2650m²の範囲を対象としたものである。今回の調査地の東に接する地域は，かつて国道165号線バイパス建設計画に伴う事前調査の一環として，奈良県教育委員会による発掘調査（昭和41～43年）が行なわれており，藤原宮北面大垣SA140と，その南北を東西に流れる2条の溝SD143，145などが検出されている（奈良県教育委員会『藤原宮』昭和44年）。今回の調査は，こうした現在までの調査成果から推定される北面中門を検出して，その位置および規模・構造を確かめること，また，その成果と，第1次調査として実施した宮南面中門の調査成果とを合せて，現在なお不明確なままになっている藤原宮の中軸線を確定すること，以上の2点を主要な目的として実施したものである。

検出遺構は，藤原宮造営前（A期），藤原宮期（B期），その他に分れる。

B期に属するものには内濠SD143と外濠SD145，外濠SD145に接続して北流する南北溝SD1901－B，SD145にかけられた橋の橋脚SX1902，そして3個の土壙SK1903・1904・1905等があり，他にSB1900およびSA140の造営に際して埋められた南北溝SD1901－Aがある。

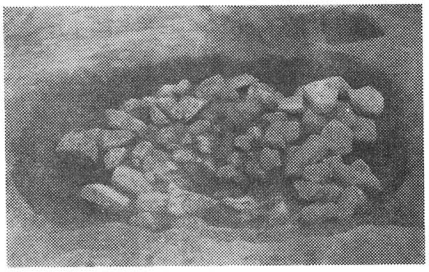


第18次調査地全景（南から）

A期の遺構としては，南北道路SF1920（条

坊朱雀大路計画線）と２棟の掘立柱建物SB1910・1911，それらに伴う３個の土壙SK1913・1914・1915他がある。今回の調査地域では，さらにこの道路SF1920建設以前の遺構として，その東側溝SD1921に重複して南北溝SD1925，西側溝SD1922に重複して西北方向に流れる２本の自然流路SD1923 SD1924を検出した。

北面中門SB1900は，桁行５間（総長２5.2ｍ），梁行２間（総長１0.1ｍ），柱間17尺（5.04ｍ）等間の平面規模を持つ大規模な礎石建物であり，その規模は平城宮朱雀門に一致する。後世の削平のため，基壇土や礎石すえつけ痕跡（根石など）は全く検出されなかったが，礎石すえつけ位置に限定された一種の掘込地業の痕跡から，その規模を知ることができた。礎石下の掘込地業は，方1.8ｍ前後の不整方形の穴を掘り，その内部に灰色粘質土と茶褐色土を厚さ5㎝前後の互層につきかためた構造のものである。東西の側柱列，ことに南北溝SD1901の埋めたて部に位置する，東側柱列に当る穴では，それに加えて大量の石を穴の底部に敷きつめており，礎石の不等沈下に対する配慮がみられる。SB1900に伴う基壇やそれをめ



地業の栗石（SB1900）

A期	SF1920	朱雀大路計画線	B期	SD1901・A	木簡・瓦出土
	SD1921	SF1920 東側溝		SA140	北面大垣
	SD1922	SF1920 西側溝		SD143	内濠
	SB1910	2 × 4 以上		SD145	外濠
	SB1911	1 × 4 以上		SD1901・B	
	SK1913			SB1900	北面中門・礎石建物・2×5
	SK1914			SX1899	SB1900の足場
	SK1915			SX1902	橋脚
その他	SA1930	時期不明・SD143埋土より新		SK1903	木簡出土
	SA1931	平安時代後半		SK1904	
				SK1905	

第18次調査　主要遺構一覧表

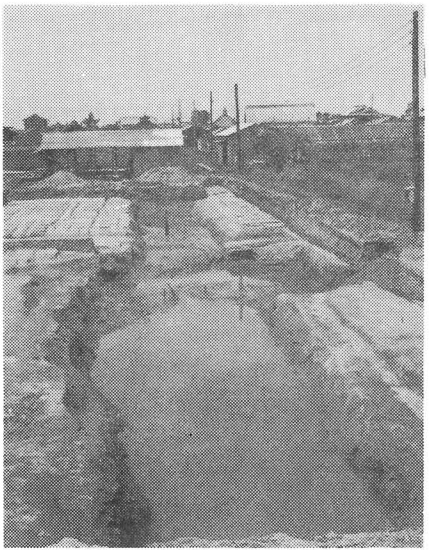
ぐる雨落溝などの痕跡は全く遺存しなかったが，外濠SD145上層より出土した凝灰岩切石片の存在から，恐らく凝灰岩切石で化粧した基壇を持つものであったと考えられる。

北門SB1900に伴う足場SX1899は，方0.6m前後の掘立柱穴から成るもので，SB1900の柱位置の間にほぼその柱筋をそろえてあるものと，SB1900の外周をめぐる1列を検出した。柱穴にはいくつか柱痕跡を残す例があり，また抜き取り跡が全く認められないことから，恐らく基壇上面の化粧前にその上半部を切り落したものと考えられる。なお，足場の柱材には径15cm程の円柱を用いているが，他に補強材として用いたと思われる角柱を伴うものがあった。

北面大垣SA140は，北面中門以西で2間分，北面中門以東では，未調査の12間分を含めて，総長68.6m，26間分を検出した。柱間にはややばらつきがあるが，平均2.64m（9尺）の等間に復原できる。なお調査範囲内では，脇門に相当する施設は検出されなかった。

内濠SD143はSA140の南12.0m（40尺）を東西に流れる素掘りの溝で，幅1.5～2.0mを測る。埋土より大量の瓦と土器，木簡2点が出土した。

外濠SD145はSA140の北23.6m（80尺）に位置する。幅4.5～5.5mの大規模な溝で，この溝もまた素掘りである。調査地区中央で，北流する南北溝SD1901−Bに接続するため，この部分ではSD145南岸が幅20mに亘って大きく削り取られている。またSD145の西半，北門SB1900の中央間に対する位置には，方20cm余の角杭を打ち込んで橋脚としたSX1902がある。この上に橋桁をわたして，橋としたものであろう。内濠SD143では，このような橋の施設を検出しなかった。溝幅がせまいため，直接板材をわたすなど，より簡単な構造のものがあったのかもしれない。外濠SD145の埋土からは，瓦・土器・木製品とともに，500点を越える



SD145（東から）

大量の木簡が出土した。内濠・外濠出土の大量の瓦は，いずれも北面中門SB1900に用いた瓦の一部をなすものと考えられる。恐らく，SB1900建造時，もしくは平城遷都に伴って解体した際に，破損し，溝内に投棄されたものであろう。

3個の土壙の中，SK1903からは，瓦・土器に混じて，「蝮王　猪使門」の二つの門号を記した木簡が出土した。文献史料上で知られる藤原宮の門号としては『続日本紀』大宝二年六月甲子条にみえる「海犬養門」のみであるので，藤原宮諸門の門号史料としてきわめて重要であり，とりわけ藤原宮北面中門の門号を「猪使門」とする有力な一知見を得たものとして，特記すべき出土品である。

以下に，SD145及びSK1903出土木簡のうち主要なものを掲げる。詳細については別報（『飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報』Ⅱ昭和50年）を参照されたい。

〔SD145出土木簡〕

1. （表）　□□□荷處〻塞職等受

（裏）　常僧　師首　僧□

常僧　常薬　薬首　市　市□　僧　□

2. （表）　辛卯年十月尾治國知多評　（裏）　□□(八家カ)里神マ身□□

3. 丙申年七月旦波國加佐評□

4. （表）　丁酉年若伜(ママ)國小丹生評罡田里三家人三成

（裏）　御調塩二斗

5. 大寳三年十一月十二日御野國楡皮十斤

6. 次評新野里軍布

〔SK1903出土木簡〕

7. 九月廿六日薗職進大豆卅□

8. （表）　於市□(沽カ)遣糸九十斤　蝮王　猪使門

（裏）　月三日大属従八位上津史罡万呂

9. 下毛野國足利郡波自可里鮎大贄一古参年十月廿二日

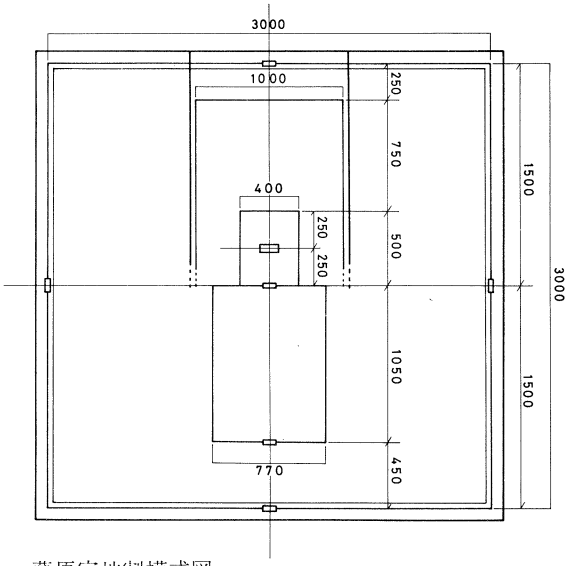
北面中門・大垣・内濠の造営に先立って埋められた南北溝SD1901－Aは，遺構の重複のため，その極く一部を調査したに留まったが，幅6～8mの素掘りの溝で，やや蛇行しながら北流し，溝内の厖大な砂堆積からかなりの水量のあったことがわかる。下層より，磨耗した瓦とともに木簡，手斧の削りくずが出土しており，北門・北面大垣，他の造営に先立つこの時期に，すでに宮中心部の造営が始まっていたことを示すものとして注目される。この南北溝SD1901－Aの上層を覆う黒褐色の整地土は，後に述べるA期の道路SF1920の東側溝の上を覆っており，少なくともその整地の時期には，SF1920の東西両側溝は埋没していたようである。ただ，SD1901－AとSF1920とが一時期併存した可能性は残されている。なおSD1901－AのSD145以北の部分は，先にも述べたように，外濠SD145の開穿後もそれに連続する藤原宮の基幹水路の一部として使用されることになった（SD1901－B）。

北面中門SB1900に重複して検出された南北道路SF1920は，正しく宮中軸線上に位置しており，条坊朱雀大路計画線の宮内延長部に当るものと考えられる。東西側溝間の心々距離15.8m，路面の幅員15.0m前後を測り，現在までに検出している小路計画線（SF1081～1083，SF1731～1732）の幅員（約6.0m）の2.5倍に当る幅を持っている。恐らく，それぞれ幅員50尺，および20尺として計画されたものであろう。なお，今回の調査では，この道路の東西側溝SD1921とSD1922に重複して，南北溝SD1925と2本の自然流路SD1923・1924を検出した。いずれも道路建設以前のものであり，また，その出土土器から，現在までの調査では不明確であった，条坊計画線（SF1920他）の施行時期の上限について確証を得ることができた。これらによれば，道路SF1920の建設は，藤原宮造営直前の7世紀の第Ⅳ四半期の中にあり，少なくともそれを遡るものではない。この事実も，今回の調査の成果の一つとして特記すべきことである。

SF1920の東側溝SD1921に重複する南北溝SD1925については，ほぼ真南北に走ること，また時期的にSF1920の建設以前の7世紀後半に限定されることから，その性格が注目されるが，現在のところ，こうした事実以上にその性

格についての手がかりがなく，今後の調査による究明に期待したい。

以上述べてきたように，北面中門を中心とする今回の調査では，北面中門の位置およびその規模，構造を明らかにするとともに，それに先行して建設された朱雀大路計画線の存在とその規模を明らかにすることができた。また，北面中門の造営に先立って埋められた南北溝 SD1901 －Aとその出土品は，北面中門・大垣の造営と宮中心部の造営にいくらかの時間差のあったことを明らかにした。最後に，今回の調査成果を過去の調査成果と合せて，宮中軸線を含む，宮全体の計画を検討して，報告の結びとしたい。



藤原宮地割模式図

まず，宮南門の中心と北門の中心を結ぶ宮中軸線は，N26′30″Wであり，わずかに北で西へ振れている。この軸線は，日本古文化研究所によって調査された，朝堂院の中軸線にほぼ一致する。中軸線上における宮南門SB500と北門SB1900の心々距離は906.8 *m*であり，これを仮に3000尺とすると，宮の造営尺として，1尺＝30.2*cm*の単位を得ることができる。北面中門・大垣から得られる造営尺は29.3～29.6 *cm*の間であり，また，現在までに調査している，西方官衙，他の藤原宮主要建物から得られる造営尺もこれに近い。この29.5 *cm*前後という値は，この時期の一般的な尺値に近いものであり，個々の建造物の造営に当っては，こうした一般的な尺度を用いたと考えるべきであろう。従って，この1尺＝30.2*cm*の単位尺は，宮の大計画に限定されたものと考えられる。ここで仮に，この30.2*cm*を造営尺として，宮主要部の計画寸法を算定すると図示したとおりであり，いずれもほぼ完数を得ることができる。そうした意味からも，宮の大計画に限って，一尺＝30.2*cm*というやや異例な単位尺を用いた可能性はかなり高いと考えられる。ただ，ここに示したものは，あくまで

30.2cmを宮造営尺と仮定した数値であり，また，日本古文化研究所によって調査された大極殿や大極殿回廊に代表されるように，宮主要部でありながら，明らかにその軸線がここに示した宮中軸線に一致しない例がある。そうした問題を含め，各部分の詳細については，施工誤差や精度の問題にも及ぶため，当該地域の本格的な調査を待って論ずべきであろう。ここでは，宮全域にわたる要な計画寸法を提示するに留めておきたい。なお，国土地理院第6座標系による宮南門SB500と北門SB1900の中心位置は以下のとおりである。

南門SB500 (X＝－167,020.1 M
Y＝－ 17,419.2 M)

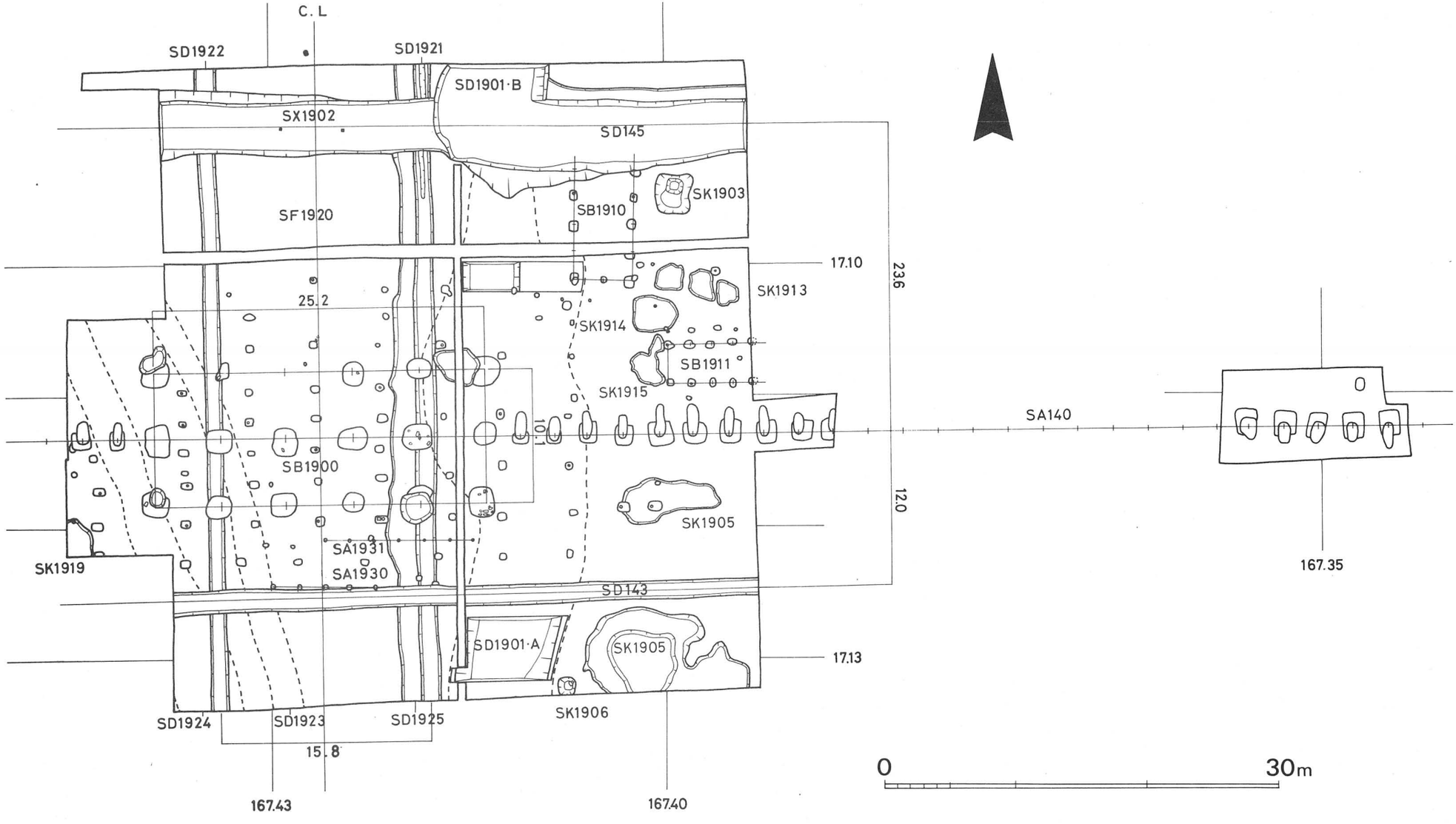
北門SB1900 (X＝－166,113.4 M
Y＝－ 17,426.3 M)

藤原宮第18－7次の調査

（昭和51年2月）

藤原宮第18－7次の調査は民家の改築にともなう事前調査として行ったものである。調査地は藤原宮の東外濠SD170の想定位置にあたる。巾1m，長さ6.5mのトレンチを東西にいれた。検出した遺構は，予想された藤原宮の東外濠SD170の東側3.5m分と他に柱穴1，土壙2である。この結果，東外濠SD170の位置を東面中門と南門との間で確認し得たこととなり，昭和42年に奈良県教育委員会によって検出された東外濠SD170の北端とむすぶことによって，藤原宮の宮域東端の線を東面中門以南のところまで，ほぼ確定することができた。出土遺物には，SD170より出土した多量の木片とともに，まげ物，他の製品と，36点の木簡がある。釈読できるものは次の通りである。

1. 大宮□官奴婢
2. □煑二□
3. 大祐務正七位上□
4. 大□水取大□□
   石寸ア安末呂



第18次調査遺構実測図